

巻頭言

「いだてんと2020東京オリンピック」

理事長 新谷友良

昨年末終わったNHK大河ドラマ「いだてん」の関東地区での平均視聴率は8.2%。大河ドラマ史上最低で、「あまちゃん」で大ブレイクした脚本宮藤官九郎、音楽大友良英コンビの作品は、大河ドラマには向かなかったという評がインターネットに載っています。

「いだてん」が描く前回の東京オリンピックは1964年、高校2年生でした。家族が開会式のチケットを申し込み、奇跡が起こって抽選に当たりました。開業直後の東海道新幹線に乗れることもあり、一人で東京に行く決めていましたが、両親が許可せず、涙を吞んで東京にいた長兄にチケットを譲りました。結局、テレビと新聞で体験する東京オリンピックに終わってしまいましたが、10月10日の真っ青に晴れた開会式を学校の視聴覚室で観た記憶が今でも非常に鮮明です。

オリンピックのあと、大阪では1970年の万国博が大変大きなイベントになりました。自宅が万博会場に近かったので、岡本太郎の「太陽の塔」が日増しに異形を現わすのを目撃し、万博開催近しという高揚感を肌で感じました。その年の4月に就職で東京に移り住みましたが、8月に無理やり帰省して3日間万博に通い、暑さの中で人ごみにまみれました。

オリンピックにしても万博にしても大掛かりなイベントにすぎませんが、その時代の勢い、匂いを伴って、個人史の中でかなり大きな部分を占めます。1960年から1970年は高度成長の真っただ中で、テレビのカラー放送が始まり、高速道路や新幹線が開通し、全共闘の東大安田講堂占拠がありました。大河ドラマでいえば、第1回の「花の生涯」が1963年に放映されています。個人的には中学、高校、大学の10年間はそっくり間に挟まっているので、この10年の記憶は強烈です。

2020東京五輪・パラリンピックはどのような時代の勢いと匂いを持って開催されるのか。ミライトワ・ソメイティのマスコットデザインと亀倉雄策のオリンピックポスターには、56年の時間の経過では済まない大きな落差を感じます。前回の最終の聖火ランナーに無名の坂井選手が選ばれたように、サプライズを持った最終ランナーが（意中の人はいませんが…）、中村勘九郎や阿部サダヲや松前豊や松坂桃李が「いだてん」に表現した喝采感をもたらしてくれることを、ひそかに期待しています。